

P-376 卵巣成熟嚢胞性奇形腫悪性転化例
の臨床的因子に関する検討

日本医大

米山剛一、太田雄治郎、土居大祐、黒瀬圭輔、
小西英喜、鴨井青龍、荒木 勤

[目的]本研究では卵巣成熟嚢胞性奇形腫の悪性転化例の臨床的特徴を良性例との比較により検討することを目的とした。[方法]1993年1月1日から1998年8月31日までの5年8カ月間に当院産婦人科で診断、治療を行った良性卵巣成熟嚢胞性奇形腫215例とその悪性転化例6例、計221例を対象とした。両者、各々の初診時年齢、腫瘍径、腫瘍マーカーCA125、CA19-9、CEA、SCCの値、腫瘍の発生側を比較検討した。[成績]良性卵巣成熟嚢胞性奇形腫の平均年齢は 35.7 ± 13.6 (Mean \pm S.D.)歳 ($n=215$)で腫瘍径の平均は 7.5 ± 3.1 cm ($n=161$)であった。腫瘍マーカーの平均値はCA125 32.7 ± 68.3 U/ml ($n=204$)、CA19-9 118.9 ± 271.7 U/ml ($n=189$)、CEA 2.9 ± 14.0 ng/ml ($n=139$)、SCC 1.2 ± 1.07 ng/ml ($n=138$)であり、CA19-9の値は正常域を超えていた。腫瘍の発生側は右側が47%、左側が41%、両側性が12%であった。他方、悪性転化の頻度は2.7%に認められた。悪性転化例 ($n=6$)の平均年齢は 47.3 ± 13.0 歳で腫瘍径の平均は 19.2 ± 4.4 cmであった。腫瘍マーカーの平均値はCA125 500.8 ± 536.7 U/ml、CA19-9 552.8 ± 714.5 U/ml、CEA 22.8 ± 28.9 ng/ml、SCC 74.4 ± 121.0 ng/mlであった。腫瘍の発生側は右側が33%、左側が67%であり、左側原発が多かった。[結論]卵巣成熟嚢胞性奇形腫の悪性転化例では良性に比し1 発症年齢が高齢 ($p<0.05$) 2 腫瘍径が大きい ($p<0.05$) (全例が小児頭大以上) 3 腫瘍マーカーSCCの高値 4. 左側原発が多い等が特徴的であることが明らかとなった。

P-377 増殖関連S100遺伝子カルサイクリン
の上皮性卵巣腫瘍における発現の解析—腫瘍悪性
度との関連について—

松山市民病院、愛媛大*

松元 隆、田坂美恵、原 美幸、西 睦正、
越智 博*、伊藤昌春*

[目的]近年、S100蛋白に相同性のある遺伝子群が細胞分化・増殖および細胞周期に関連して次々にクローニングされた。これらは分化関連群

(S100 α , S100 β , MRP8, MPP14等)と増殖関連群(カルサイクリン、カルバクチンI軽鎖、カルバスキュリン)に大別できる。われわれは後者3種の増殖関連S100遺伝子の発現が婦人科領域の培養腫瘍細胞において亢進し、その発現は細胞周期、アポトーシスおよびプロテインキナーゼCの活性化と関連しており、特にカルサイクリン蛋白の発現は子宮頸癌・体癌において浸潤度と相関することを明らかにしてきた。今回、カルサイクリンの発現を上皮性卵巣腫瘍において解析した。

[方法]カルサイクリン分子において抗原性および特異性の高い領域の合成ペプチドを作成し、キャリアー蛋白と結合後、家兎に免疫した。抗血清よりIgG分画を精製し、ポリクローナル抗体を得た。ドットプロット法により抗体の特異性と抗体価を確認後、免疫染色に用いた。正常卵巣および上皮性卵巣腫瘍15例(良性5例、境界悪性4例、悪性6例)のバラフィン包埋切片を用い、LSAB法にて染色した。[成績]カルサイクリン蛋白は正常卵巣では発現していなかったが、良性1例を除く上皮性卵巣腫瘍14例において発現していた。また、核における発現は良性5例中0例、境界悪性4例中1例、悪性6例中4例であった。[結論]増殖関連S100遺伝子の一つであるカルサイクリン蛋白は(1)上皮性卵巣腫瘍において発現が亢進している、(2)核における発現が悪性度と関連していることより、腫瘍化および悪性化に関連した役割を担っていると考えられた。